

す。

山を鹿が峯と呼び、崖の下の川のほとりに古びた小さな祠がたっています。祭神は保食大神、宇加之魂命の二柱とも、平将門を併祀しているともいわれ、古くから馬の神様として祭日には、近郷近在の馬が集って、驚く程の人馬でにぎわいました。土地の人々は代々つぎのように語りついできました。

むかし、「相馬のお殿様のご先祖にあたる平将門という人が、俵藤太秀郷という人らに亡ぼされたとき、三女の滝夜叉姫は、父の仇を討とうと心魂を傾けたが、とうとう果すことができずに、巡礼の姿となって父の像を背負い奥州に下り、いわきの玉山にある恵日寺という寺のそばに庵を結んで一生を終ったが、この像が巡礼観音とか、飛付観音とかいわれ、子孫のお殿様がこの地方に移ったので、こちらに來たなそうだよ。」

またこのようにも云っています。

「むかし、野山が若葉に包まれ、山桜が咲ききそう春の日の午後のこと。突然あたりが金色の光に輝やいたので、みんながびっくりして地べたにひれ伏したが、この時お空に馬のいななきや、くつわの音がしたので恐る恐る空を見上げたところ、金色の馬にまたがった観音菩薩様が、紫の手綱を絞って空がける姿をおがんで再び地にふれ伏したが、鹿が峯に飛びついたと見るまに、かき消すように姿がきえてしまったので行ってみると、崖にくっきりと馬の蹄の跡がのこっていて